

# 推薦のことば

この度、「胆膵内視鏡の診断・治療の基本手技 第3版」(編集：糸井隆夫教授)が、羊土社から刊行された。本書の初版が2008年であり、約10年にわたるlong sellerとなっていることと同時に、全国の多くの先生方から支持されてきたことに深く敬意を表したい。本書の特徴は、糸井隆夫教授自身と東京医科大学消化器内科のスタッフがほぼすべての項目を執筆されていることである。多くの施設の先生方による分担執筆の書籍と異なり、胆膵内視鏡の基本から関連手技の解説が一貫した流れで解説されている。

ERCP, EUSを主とする胆膵内視鏡について、糸井教授は、今や世界中の医師が世界一の胆膵内視鏡医と認める実力を有している。世界中から胆膵内視鏡のライブあるいは講演に毎月招待されており、欧米のドクターと自信をもって英語でディベートしている姿を何度も拝見してきた。その自信の背景には、「旺盛な好奇心」「積極性」「不断の努力」に基づき、新しい手技や知見をいち早く取り入れて、自分なりの工夫をさらに加えて発展させる卓越した能力がある。また内視鏡エキスパートにありがちな独善的な態度ではなく、常に仲間や同僚に優しく気遣いをされ、後輩に温かい思いやりをもって接され、糸井教授の元には多くの若い先生が集まっている。本書の随所にこのような糸井隆夫教授自身の日頃の診療姿勢と哲学を垣間見ることができる。

私自身は、大学を卒業して間もない1970年代後半を癌研究会附属病院で消化管診断学の研鑽を積み、同時にERCPの開発者の一人である高木国夫先生に直接ご指導を受けた。その経験をもとに1980年代は国立がんセンター中央病院（当時）で、膵癌の診断・治療の臨床と研究に寝食を忘れて没頭していた。その頃から40年近く経た今は、胆膵内視鏡の診断と治療法は見違えるほどに発展している。しかしながら、この領域は、解剖学的にも生理学的にも複雑であるために、消化管や肝臓領域に比べて手技が多岐・多彩で、偶発症の頻度が高く、しかも重篤化しやすいので、安全で確実に施行するために細心の注意が必要である。そのような観点からも本書は、これまでの書籍にないほど、胆膵内視鏡の診断・治療手技の基本を明快かつ丁寧にわかりやすく解説しており、“バイブル”になると言っても過言ではない。

コラムに記載されている「海外留学のすすめ」、「僕がアメリカを目指した理由」は、糸井隆夫教授の友人や後輩達からのメッセージであるとともに、日本の第一人者からさらに世界に大きく羽ばたいている糸井隆夫教授自身が次世代を担う先生方に送る熱いメッセージでもある。

これから胆膵内視鏡を目指す若い先生には本書に記載されている手技の基本と実際を会得していただき、また内視鏡の指導的立場にある先生におかれては、改めて基本手技と指導法を見直して、施設内での偶発症に対する予防対策を万全にして、是非とも日常の診療に役立たせていただきたいと願っている。

2017年9月

日本消化器内視鏡学会 理事長  
田尻久雄